

緑の葉が散るまで

中学二年 O・K

「おはよう」

「お姉ちゃん、起きるの遅いよ」

「ごめんごめん」

二学期最初の朝から寝坊してしまった。私達は親がいない。交通事故で亡くなってしまった。まださくらがいて一人ではなくていいものの、やっぱり親がいないときびしい。

朝の支度をし、ごはんを食べて学校に行く。さくらは小学生だ。私は親に勧められて私立に入ったため、電車を使う。

「じゃあね」

「さくらー！」

「あやちゃん！」

さくらは別れた後、すぐ友達と話していた。安心して学校に向かう。

「おはよー、もえ。久しぶり！」

「おはよー！あおい」

今日もあおいと一緒に通学だ。

「もえ、まだ部活入らないの？」

「うん。妹もいるし、忙しいから」

部活にかける時間はまだない。

「さくらちゃんが中学入ったら入るつもりでしょ？」

「うん。そのつもりだよ」

「そっか。楽しみ〜」

「何部に入ろうかなあ」

「陸上は？もえ、足速いからさ」

「あ、いいね〜、あんまりお金かからなさそうだし」

などと話しながら学校に着く。久しぶりに会ったみんなが大人っぽく見える。

「もえー！久しぶり！」

「背伸びた？ぬかさされてるかも！」

「ゆいちゃん、日焼けしたね〜、真っ黒！」

「部活で日焼けしました〜！すごいでしょ」

「さすが！硬テはすごいもんねえ」

さっそく仲いい友達とわいわい話す。

「あ〜、始業式つらい〜」

「校長先生の話、長いもんね！」

「この間時間はかったら二十六分だったよ！しかもずーっと立ちっぱなしで！」

「あれはきつかった…」

そう、校長先生は話が長い。話すととまらなくなるタイプだ。しかも、口をもごもごさせて話すので、みんな聞く耳を持たない。

「立ったまま寝る人いるよね！」

「先生からのお仕置きは痛いよ〜」

ゆいちゃんは前の日徹夜して、寝てしまったことがあったのだ。

「持っていたバインダーでバシンとね」

「その場でヒーヒー言っちゃうよ」

「この前、泣いてる男子がいたよ！」

「男子が〜でも、あれは痛いからわかる！」

ゆいちゃんがうんうんと頷いていると、先生が教室に入ってきた。

「着席一。今日は始業式だ。朝から元気な人が多くていいが、寝るなよ。先生からのお仕置きは痛いぞー。それから、校長先生の話は長いが、我慢しろよ。先生でもきついが。」

先生はみんなからの笑い声を聞いて元気な事を確認している。

「とにかく今日から2学期だ。夏休みを引きずるなよ。けじめをつけろ。」

先生の話が終わり、私達は体育館へ向かった。

「みんなで校長先生の話、時間はかろうね」

と約束した。

「校長先生のお話です。」

きた！みんなではかる。

「何分だった？」

「十五分！」

「十五！」

「十五分だった〜！」

みんな同じ答えだった。

「やー長かった」

「でも、前回よりはよかったね」

「前は一番長かった！」

「二十六分は地獄だった」

無事に始業式も終わって、帰るときになった。

「もえ、学校で食べて行かないの？」

「今日はね。妹も早いし」

「そっか。じゃあまた明日！」

「うん。部活頑張ってるね！じゃあね〜」

みんなと別れて帰る。しかし、それは今日いきなりだった。

「何？地震？」

電車を降りてスーパ―を寄り終わった時に、急に地面が揺れ出した。スマホで見ると、

宮城で震度六弱の地震が起きたようだ。さくら、大丈夫かな。ちょうどさくらも下校時刻だ。三分くらい繰り返していた地震がおさまってから急いで帰る。家に着くと、知らない女の人とさくらがいた。

「あ、お姉ちゃん！」

さくらが叫ぶ。

「よかったですみません、迷惑をかけてしまって」

と私は女の人に言う。

「大丈夫よ！この子が鍵を持っていくのを忘れたのと地震があつて心配になったから一緒に待っていたの！よかった、二人とも無事で」

女の人はさくらと一緒に待っていてくれていたようだ。何となくお母さんに似ている。

「ありがとうございます。あの、もしよかったらこれ、大したものではありませんが、もらっていい下さい」

と私は買ってきたアイス差しあげた。

「いいの？ありがとうございます！私もこの近くに住んでいるから、また会えたら嬉しいな。じゃあ、またね」

女の人と別れ、さくらと共に家にはいる。

「よかった、無事で。あの女の人、お母さんにちょっと似ている感じがしたな」

「私もそう思った！似てるよね。お母さんだったりして？」

「そんなことないでしょ。でも、もしかしたら私もさくらも知らない、お母さんの友達だったのかもね。」

私が制服から着替えてからごはんを食べた。

作るのも面倒だったので、レトルトカレーだ。

「夜もカレーでいい？」

「いいよ別に」

ということ、夜もカレーに。ニュースを見ると、今日の地震についてやっていた。宮城で震度六弱、ここは震度四だった。今のところ死亡した人はいないらしい。スマホを見たら、大量に通知がたまっていた。学校にいた人も返っていた人も大丈夫だったようだ。

さて、次の日の夜までカレーにした私とカレーに飽きた妹は本当にくだらない喧嘩をしてしまった。

「またカレー？それ以外にないの？」

「ないよ。文句あるんだったら自分で買ってきてよ」

「毎日カレー、飽きたよ。」

「しつこいなあ。嫌だったら自分で買ってきてって言うてるのに！しかも昨日いって言うてたじゃない！」

「昨日だけのことだよ！お母さんだったら毎日変えてたのに。」

「お母さんはもういないじゃない！私だってお母さんがいいよ！どうしてあのことを思い

出させるの？ 苦しい思いを楽しもうとする人が一番ひどい人間だよ！」

わたしはいらいらしながらお皿を洗う。人のことも知らないで、お母さんのことをずけずけ言ってる。どれだけひどいんだ、さくらは。

私は次の朝、怒りはおさまったものの、まださくらを許さなかった。

「どうしたの、もえ？ 元気ないけど」

「妹とけんかして許せないだけだよ。お母さんのこと、出してくるんだもん。」

「まあまあ。早く仲直りしなよ。たった一人の家族なんだし。さくらちゃんまでいなくなっちゃったら、もえ、立ち直れないと思うよ。」

確かにその通りだ。でも、向こうから謝ってこないとすっきりしない。

けんかしてから二日後、学校から帰って来ると、手紙が置いてあった。

『お姉ちゃん。お母さんを喧嘩の引き合いに出してごめんなさい。ごはんがあることだけでもいいことなのに、わがまま言ってごめんなさい。』

そこへさくらが帰ってきた。

「買い物、行ってくるね」

「うん」

二人がお互いを許した瞬間だった。

買い物の帰り、また女の人に会った。

「また会えたね！ どう？ 元気にやってる？ さくらちゃんも元気？」

「はい。けんかしていましたが仲直りしました。私もさくらも元気です。」

「そう。でも仲直りしたなら良かった。」

と言って女の人はまだ緑色の葉を見た。

「人間が過ごす一日一日はこの葉っぱみたいなものなんだよね。葉っぱはいつか散っちゃう。私達の一日一日も散っていく。いつかは散ってしまう生活を大切に過ごさないとね。大切な人生をつまらないことで終わらせたくないでしょ？ いつでもお母さんとお父さんは見守っているからね…」

女の人は静かにそう話した。

「家族を大切にしてくね…。じゃあ、またいつか会おう！」

私はびっくりして女の人が行ってしまうのをとめた。もう二度と会えない気がした。

「あの…、あなたの名前は…？」

女の人はとまって、こっちを向いた。

「私の名前は……。ヒミツ！」

といった女の人はそのまま行ってしまった。途中で手を振って…。

それから、私もさくらも女の人に会うことはなかった。女の人にあげたアイスはなぜか冷凍庫に入っていた。もしかしたら、妹が言っていた通り、女の人はお母さんだったのかも知れない。